

【ねがいましては】

平成22年11月25日

KYOWA SCHOOL

第241号

「文字」

ある日の授業、文字について気がついたことがあります。

伝えるということについて話していた時のことです。

まず人は自分の意思を伝える手段として「ことば」を手に入れた。しかし、ことばは相手の心に入り込んでも、やがて時間というものが徐々に削り、影が薄らいでいく。それを防ぐ手段として「文字」が現れた。

つまり文字の持っている最大の役割は、自分の心の状態を相手に伝える、または保存する。文字には真剣な想いが込められているのだと……。真剣に生きようとする心の表れであると……。

文字の持っている原点を再認識したわけです。

で、子どもたちにとっての『文字』が、今、どうなっているのか。結論は『合えばいい』です。文字を書く環境は、学校という空間が過半数を占めているでしょう。しかも自分のノートに書く割合よりも、圧倒的に、テストや宿題といった命令的な場合が多いと思うのです。自宅学習にしても、宿題以外に積極的に字を書くケースは少ないのが現実だと思います。しかも書いたとしても他人に知らせるための字でなく、テストのための練習であったり……。

いつのまにか、合えばいいというためだけの文字になってしまっているようです。成績のための文字、宿題のための文字。ですから、一度でもとても読めたものではない字を書いてマルをもらったりすると、もう占めたものです。丁寧さはどこかへ消え失せ、雑極まりない字へと変貌を遂げていきます。

そのすべては勉強に対する逃げや無関心など、前向きな気持などないのが当然でしょう。小学校低学年時点で、これを覚えてしまうと、もうなかなか脱出することはできません。箸の持ち方を右から左へ持ち替えたと同じです。

責任の一端は学校側にもあると言わざるを得ません。先生がとてもではない字にマルをつけてしまえば、これはもう子供たちにとっては「ヤッター」です。「こんな字でいいんだ……。」許可されたことになるのです。

子供たちの中に現れる文字に対する偏見です。子供たちにとっては、叱られなければいいという一種の判断材料が宿っています。物事の良し悪しは、叱られたから、叱られなかったからになります。

文字とは自身の「こころ」を伝えるもの。常に相手の「こころ」に気を配りながら使うもの。もともとの文字の出発がそこにあった以上、大切な原点です。合っても合わなくても、「先生、これが今の自分の精一杯の字なんです。」「これが私です。読みづらい字があったらごめんなさい。ストレスためないでくださいね。」といった想いが伝わってくるような字こそ本物の字だと思います。子どもたちにとっては、ほとんどが競争の種になります。宿題終わらせるにも早い方がいい。計算も速い方がいい。もちろんテストも速く終わらせたい。速さは子にとって魅力なのです。

もし、この文字の基本が小学校入学時点から注がれていれば、子どもたちのこころを育むと同時に、字にもこころが伝わっていく……。常に相手の心に配慮をおき、字を書く……。当たり前なことではないでしょうか。

いつのまにか成績や宿題、競争などによって忘れ去られていったものの代償はかなり大きなものであると言わざるを得ません。

ここではそろばんの時間でも、学習の時間でも、ほとんど競うことをしません。ですから当たり前といえども当たり前なのですが、バツが少ないのです。ただし題数は少なめです。しかし将来社会へ旅立ったとき、通用するものは何でしょう。計算代数が人一倍多いのだが、ミスが多いのと、題数は少ないが、確実に仕上げてくるのとは、会社側の期待度は簡単に結論づけられます。

そろばんのマルつけの際、字についてはよく褒めることにしています。「この字のまま、大人になろうね。」

文字とは相手に読んでいただくもの。相手のこころを気分悪くさせてしまうような字では、人の基本が全くできていないことになります。

子が成長していく上での大切な基本……。まず「こころ」を育てあげること。

テストで順位が上がったとか下がったとか、いつも我が子を他のお子さんと比較してしまうとか、簡単な問題に長時間かけて取り組んでいる我が子に苛立ち、ついつい小言をいってしまったり……。

もし自宅で丁寧に「字」を書いているのであれば、心の底からほめてあげてください。戻ってきたテストがとんでもない点であっても、こころが洗われるような美しい字で埋めつくされていたとしたら、どうかほめてあげてください。きっとお子さんは友だちで溢れる、多くの人たちから愛される『ひと』に成長すると思います。

なぜなら、いつも人を思いやる気持ちで文字に触れているわけですから、誰にでもやさしさを配ってあげられるトレーニングを毎日のようにしていことになると思います。

「よーし、生きてやるぞ。もっともっとたくさんの人たちの表情に笑みを浮かべてもらうんだ。」

前向きに生きてこそ『ひと』。他人を思い遣ってこそ『ひと』。ここはそんな子たちで溢れています。